地域研究　Vol.48　No. 1　pp. 1～13
2007－11　　ISSN 0389-6641

渋谷の地域層位

大塚昌利*

本論は，ある時代の主要な地理的事象の配置を地域層とし，各地域層の重層的な重なりを地域層位と表現して，渋谷駅を中心とする地域を事例にその特性を考察したものである．時代を8区分し，それぞれの地域層の特性と地域層間での変化を明らかにした．

渋谷川を中心に，それに沿う低地とその両側に広がる坂，さらにその東西に延びる二つの台地という比較的単調な対称性が，各地域層の特色を生み，さらに地域層位に興味ある変化を生じさせた．特に東西の台地上の空間的変化は，近世以降の都心力の増強・拡大が深く関わっており，近代以降の変化は武家屋敷跡という広大な空間が，それらを受容した結果であった．一方，渋谷川に沿う低地の変化が南北軸の変化を生み，さらに坂から台地という東西の変化にも関わったことが，この地域の地域層位を複雑で特色あるものとした．

［キーワード］1 地域層位　2 渋谷川　3 低地，台地，坂　4 武家屋敷　5 渋谷

Ⅰ　はじめに

田中啓爾によって「地位層」という概念が示されたのは『地理的総合研究』（田中，1958）であるが，すでにその前に「立体的観方」（田中，1949）としてその一端は示されていたといってよい．地位層は，ある地域において中心から縁辺部にかけての層位の変化（傾斜）を表現したものである．地位層を含む田中の地理学の概念や本質については，田村（1984）に詳述されている．地位層の概念は，その後服部銈二郎に引き継がれた．服部（1984，1989）は，江戸・東京をはじめとする多くの地域において，「成長層」を経て「地域層序」という表現により，独特な二次元的表現で地域の変容や空間的な対比を行った．のちに，それは地域軸と時間軸に産業展開軸ともいうべきものを加えた三次元的表現へと進むことになる（服部，1988）．しかし，それ以外にこれらの概念が援用されることはほとんどなく，この概念は消失したかにみえた．ところが，最近斉藤（2006）が田中の足跡を追いつつ地位層を評価し，自らも「文化層序」という表現で，中央日本における盆地の文化層序を明示した．これらの概念は細部での違いはあるものの，大筋では同一の範疇にあるものといってよいであろう．

歴史的な変化から地域をみるのは，地域の性格を明らかにする一つの方法として広く取り入れられてきており，むしろ当然の方法であるといってもよい．しかし，地理学の主要な手法である“図に表す”ということを考えたとき，単に年表や記述のみで歴史的変化を追うのではなく，いかに表現するかということが重要になってくる．ここに地位層，地域層序，文化層序という概念とともにそれによる表現が重要性を帯びることになる．

本論は，渋谷の「地域層位」を表現しようとするものである．地域層位としたのは，ある地域のある時代における地理的事象の空間的な配置を地域層ととらえ，それらが過去から現在まで何層にも積み重ねられる過程で変化してきた状況，すなわち地域層の重なりを地域層位として表現しようとしたためである．

地理学が活性化するためには，地域の“おもしろさ”を伝え，感じ取らせることが必要であり，そのために

* 立正大学地球環境科学部

は地域をどういう視点でとらえ，どう表現するかが重要となる．そうした視点や表現は，特に地理教育において身近な地域について考える場合に効果的である．地域層位を，そうした表現方法の一つに位置づけることも可能である．

本論が対象とする地域は，渋谷川の谷とそこからほぼ東と西に延びる坂，およびその坂上に広がる台地面を範囲としている．厳密な範囲は設定していないが，渋谷川と山手線を主体とする南北軸，国道246号を主体とする東西軸を中心としつつ，その二つの軸が交わる JR 渋谷駅を中心としたおおよそ半径800m ほどの範囲であり，東は青山学院大学（東を境する道路が幕

第１図　渋谷駅を中心とする地域

「国土地理院発行　2.5万分の１地形図「東京西部」・「東京西南部」（2001年現地調査）」による．

末期の府内と府外の境界をなす），西は道玄坂上，北は代々木公園南部，南は代官山駅・広尾一丁目あたりまでである．ただし，土地利用の記述やそれらの分布を示す図では，一部その範囲を広げている（第１図）．谷と坂と台地という地形とその対称性が，文化的層位の特徴的な変化を生む背景の一つとなっており，それがこの地域を対象とした理由である．古川の上流である渋谷川は，谷頭浸食により淀橋台を東の東渋谷台地と西の西渋谷台地に分けた．渋谷川の標高は渋谷駅付近で約15m，台地上は約32m で標高差は17m ほどである．この差が谷底と台地を結ぶ坂を生んだ．渋谷川は宇田川やいもり川などの小支流をもつが，その数は少なく台地・坂・谷底からなる地形の断面はかなり単調である．

Ⅱ　時代区分と表現方法

地域層位を表現するうえで，古い時代から現代までを地層が堆積するように，古い順に下から上へ積み重ねるようにした．時代は，１．原始・古代，２．中世，３．近世，４．明治・大正期，５．昭和戦前期，６．第二次大戦後期，７．高度経済成長期，８．現代の８区分とした．ただし，明治・大正期と昭和戦前期の間は実際には関東大震災を境目としている．また，現代はバブル経済が崩壊した以降の時期をおおよその目安としている．

次に左の欄に時代区分を示し，中央に時代ごとの主要な事項（地理的事象）を示し，右の欄に各時代の特性を示すようにした．中央の部分に関しては，中心に渋谷川をおき，その低地部から左右（東西）に斜線を示し，さらにその先を水平な太い線で表した．この東西の太い線は，渋谷川低地と，国道246号（古くは足柄道，矢倉沢往還などとよばれ，江戸期に大山詣りの隆盛に伴って大山街道などとよばれた）が通じる台地面，ならびに両者を結ぶ坂を意識したものである．これによって，古い時代からの変化を東西で順次比較することができるようにした．ただし，この表現では南北での変化をみることはできない．しかし，対象範囲が比較的狭いため，主要な事項は図中に記入することによって補うようにした．また，限られた範囲のため地理的な事象を限定せざるを得なかった面もある．こうして作成したのが第２図である．以下，それぞれの地域層における地理的事象とその特性をみることにする．

Ⅲ　渋谷の地域層位

１．原始・古代

この時代は，狩猟採集段階から稲作文化を経て，豪族が台頭するまでである．

縄文時代は海岸線が古川から渋谷川に沿って延び，貝塚があることからも生活が営まれていたことは想像に難くない．台地上には，縄文文化遺跡が認められ，現在の渋谷区には30数か所に縄文文化遺跡があるとされている（東京百科事典）．さらに弥生時代には渋谷川に沿う細長い低地で稲作が行われていたであろう．

古墳時代の証左として，小規模ではあるが円墳と横穴墳が発見されている．遺物を加えると，現在の渋谷区に相当する区域には150か所に近い出土地があるという（角川日本地名大辞典）．

２．中　世

各地に豪族が台頭するなかで，秩父氏一族の川崎基家がこの地を支配するようになった．当時，このあたりは谷森（谷盛）と称されていたようで，谷盛庄と呼ばれていた．やがて基家の子重家は渋谷氏を名乗るようになり，渋谷城を築いてこの地での支配力を高めていった．

この渋谷城が築城された場所は，東渋谷台地が渋谷川の谷に落ちる台地端にあり，前述したように比高差17m ほどの高みに作られた城であった．渋谷城址の南東に位置する氷川神社前の階段はかなりの傾斜であ

時代層	主な地理的事象	時代特性
現代	←表参道・原宿と連担　セルリアンタワー(2001)　青山通り・六本木と連担→ コギャル・孫ギャル　渋谷マークシティ(2000)　渋谷区人口194,747(2006) 渋カジ　東急文化村(1989)　ビットバレー 国立・代々木競技場　SHIBUYA109(1979)　青山劇場(1985) 代々木公園(1974)　半蔵門線(長津田～青山一丁目1978・以後延伸) 渋谷パルコ(1973)　スペイン坂・地中海通り(1975)　こどもの城(1979) 東急本店(1967)　西武百貨店(1968)　新玉川線(現田園都市線・1976) 渋谷公会堂(1965)：「８時だよ全員集合」の公開録画　東邦生命ビル(1975) NHK放送センター(1964)←(新橋)　国連大学本部(1974) 東京オリンピック競技場・選手村(1964)　渋谷川・宇田川 (ワシントンハイツ跡地)　等の暗渠化　11階建アパート(1952)	○ 情報・文化の発信基地 ○ 大人の街への回帰願望 ○ 若者の街 ○ ファッションの街 ○ ８時だよ全全員集合 ○ 娯楽飲食街 ○ オリンピック効果 ○ 副都心化 ○ 闇市
高度経済成長		
第二次大戦後	国道246号 地下街(1957) 道玄坂商店街(1949)　恋文横町 ワシントンハイツ(1945)　闇市 志賀直哉‘夜など品川の海からボゥーッと汽笛が聞こえてくる’	
昭和戦前	松濤園→公園・住宅地　東急百貨店(1934)　渋谷区誕生(1932) 忠犬ハチ公(1934)　地下鉄銀座線(1939) 井の頭線(1934)　東横線(1927)　(人口約22万) 渋谷川改修(1926)　斎藤茂吉「渋谷川うずまき流るたもとほり 関東大震災後の住宅地化・工場進出　うずまく水を見れど飽かぬかも(1915)	○ 山手線外の都市化 ○ 忠犬ハチ公像 ○ 渋谷駅のターミナル化
大正明治	関東大震災(1923.9.1)　渋谷駅(現・1920)　市バス(1924)　市電青山車庫(1911) 明治神宮(1920)　高野辰之♪*春の小川は*‥‥(1912)　國學院(1923)←皇典講究所(飯田橋) ↑　与謝野鉄幹・晶子→新詩社(1901)　実践学園(1903)←(麹町) 南豊島御料地　代々木練兵場(1909)　青山学院(1894)←英和学校(築地) 桑・茶(渋谷茶・代々木茶)　日赤病院(1891)←(飯田橋) (東京府の奨励)　日本鉄道品川線(現山手線)開通(1885) 玉川線(道玄坂－三軒茶屋1907)　渋谷駅(旧)開業　旧武家地の開墾 松涛園(紀州徳川家跡1876)　低地の工業化　人口約7,500(1872)	○ 大震災被害 ○ 山手線開通 ○ 都心部からの移転を受容 ○ 武家屋敷跡地の開墾と開発
近世	井伊・諏訪・水野家他下屋敷　江戸市中へ　富嶽三十六景「隠田の水車」 茶・筍・麦・野菜→青物市場　水車(1733)　精米・製粉　富士見茶屋　田畑／町屋　府内 稲作 大山街道　町屋・立場　府外← 三田用水　世田谷・目黒　道玄坂　富士見坂 灌漑用水　青山忠成に屋敷(1590)←徳川家康入府	○ 府内の外側 ○ 大名・旗本・寺社地 ○ 江戸防御地 ○ 近郊農業化
中世	大和田太郎道玄寺庵　渋谷重家(御家人)　渋谷城　渋谷氏滅ぶ(1524) (1521－1527)　金王八幡社(伝1092源義家勧進) 稲作 足柄道・矢倉街道　鎌倉道 谷盛(森)庄　川崎基家(秩父氏の一族)	○ 交通の要所 ○ 豪族の拠点 ○ 矢倉街道 ○ 鎌倉道
古代原始	古墳　古墳 縄文・弥生文化遺跡　宇田川　縄文・弥生文化遺跡 貝塚 大和田遺跡(無土器)	○ 豪族の台頭 ○ 低地の稲作 ○ 狩猟採集文化
	西渋谷台地　道玄坂　渋谷川　宮益坂　東渋谷台地	

第２図　渋谷の地域層位
（著者原図）

り，現在の宮益坂もゆるやかではあるがかなり長い坂道である．この比高は，防禦の点からは高い効果をもたらしていたと考えてよいであろう．また，これに接して金王八幡神社が祀られていた．さらに，北上してきた鎌倉道がこの脇を通じていたことも考え合わせると，渋谷城はかなり地の利を得た場所に立地していたと考えてよい．

金王八幡神社がのちに源頼朝によって再建されていることをみても，渋谷氏が御家人としてある程度の勢力を有していたことは推測されるが，1524年小田原の北条氏によって滅ぼされた．

一方，渋谷川から西に上った西渋谷台地の一端に，渋谷一族が北条氏に滅ぼされたのちに，その家臣であった大和田太郎道玄が庵を結んだという．居を構えたのは大永年間（1521〜27）頃とされるが，これがのちの道玄坂の由来となった．ただし，この庵寺は当初は台地の西端にあったともいわれている（新修渋谷区史）．

いずれにしても，大山街道と鎌倉道が交わるところに築かれた渋谷城と，大山街道に沿う道玄の庵が，この時代の渋谷の代表的な地理的事象であったといえよう．

3．近　世

この時代になると，この地域はかなり様相を変え，また多様化することになる．一つは，三田用水の開削である．1654（承応３）年の玉川上水開通に次いで，1657（明暦３）年に通水した．三田用水は渋谷と広尾の間で渋谷川に合流している．渋谷川の低地では稲作が行われる一方，台地上でも農業が活発に行われるようになった．渋谷川には多くの水車が架けられ，精米や製粉あるいは搾油が行われるようになった．安藤広重による「富嶽三十六景」のなかの「穏田の水車」には，当時の穏田村（現神宮前六丁目付近）の水車と，袋を担ぐ男，桶を抱え川で水洗いする女が描かれている．当地の水車は下渋谷で1733（享保18）年に始まったとされ，明治期にも増加して1888（明治21）年には現在の渋谷区に相当する地域内に32の水車が稼働していたという（渋谷区立中央図書館，1979）．1880（明治13）年の地図にも渋谷川と宇田川に12基示されており，さらに三田用水に４基，広尾町にも１基がみられる（第３図）．

明暦の大火（1657）以後，東渋谷台地は広い範囲にわたって武家地や寺領地となった．この地は西側の江戸防禦の地でもあった．第３図によると，府内の外側に武家屋敷が連なり，そのなかに寺社地が点在している．この地は青山台とも呼ばれ，国道246号は青山通りと称されている．1590年に青山忠成が徳川家康からここに屋敷を賜ったのがそのもととなった．台地の西部には，淀藩稲葉家や西條藩松平家をはじめとする大名の下屋敷がおかれ，また旗本の小屋敷なども配置されていた．

この台地から渋谷川に下る大山街道の坂道は富士見坂と呼ばれていた．坂上には富士見茶屋や建場が立ち賑わったという．さらに，この坂を下った右手にある御岳神社とその境内社である千代田稲荷の鳥居前町を中心に町屋が形成された．1853（嘉永６）年の東都青山絵図には坂に沿って集落が描かれており，明治期の地形図にも街村状の町屋が示されている．鳥居前町の賑わいが，富士見坂の名を宮益坂へと変えた．

一方，西渋谷台地では広く畑作農業が行われるようになり，麦・茶・タケノコ・野菜類が栽培されるようになった．また，背後の現在目黒区や世田谷区にあたる地域においても農業が盛んになり，道玄坂や広尾には青物市場が開かれ，農産物が集められて江戸市中へと運ばれた．一方，彦根藩井伊家，紀州藩徳川家の下屋敷などが成立していった．

このように，政治的には江戸防禦という役割を担わされ，広大な土地が武家地となったが，西部では江戸を市場とする農業が活発化し，渋谷はその集散地としての役割をもつに至った．都市化と近郊農業化が進んだ時代であり，地域であった．

第3図　幕末の渋谷と明治初期の水車の分布

幕末の状況は『わたくしたちの渋谷』，水車の分布は1/20,000迅速図「内藤新宿」による．

4．明治・大正期

明治時代には，この地の土地利用も大きく変化した．その一つは近代化に伴う変化である．渋谷川に沿うように，日本鉄道品川線（現 JR 山手線）が1885（明治18）年に開通し渋谷駅が設置された．1907（明治40）年には，玉川電気鉄道（玉電）が渋谷－三間茶屋間で開通した．当初は多摩川の砂利運搬を目的としたものであったが，のちの関東大震災以後通勤電車へと性格を変えていくことになる．また，渋谷川沿いの低地には電気機械工業や軽工業の工場が進出し，目黒川や呑川流域などとともに，城南工業地域の一角を担うようになった．当初の渋谷停車場は現在の渋谷駅より300 m ほど南に設置され，貨物駅であったが，これにより渋谷は変化のきっかけをつかんだといってよい．それまでは渋谷川の下流にあたり，目黒道が通じていた広尾のほうが市街地として活況を呈していた（角川書店，1978）．渋谷が広尾にかわって中心性を高めるのは，この渋谷駅の設置を契機としてであった．

もう一つの変化は，広大な土地が生まれたことである．明治という時代は，東京に武家屋敷跡という広大な土地が生まれ，その跡地が政治，軍事，教育，工業などに供されることによって，東京の発展を担うこと

第１表　旧武家屋敷の主な土地利用の変化

番号	旧武家屋敷	明治期～現在の主要な変化
5	彦根藩井伊家	畑・茶畑・雑樹地→南豊島御料地→明治神宮
14	高島藩諏訪家	畑・桑畑→代々木練兵場→ワシントンハイツ→代々木公園
15	結城藩水野家	畑・雑樹地→代々木練兵場→ワシントンハイツ→代々木競技場・NHK 放送センター
16	岸和田藩岡部家	畑・雑樹地→代々木練兵場→ワシントンハイツ→代々木競技場
17	浜松藩井上家	畑→住宅地
18	広島藩浅野家	畑→住宅地
19	足利藩戸田家	畑・茶畑→大山邸・浅野邸→住宅地
20	淀藩稲葉家	畑・果樹園・雑樹地→開拓使第二号用地→市電車庫・梨本宮邸→国連大学本部・こどもの城・青山病院
21	紀州藩徳川家	茶畑→鍋島農場（松涛園）→公園・住宅地
25	西條藩松平家	英和学校・雑樹地・菓園・ブドウ畑→開拓使第一号用地→青山学院
26	福岡藩黒田家	茶畑→畑・住宅地
27	鹿児島藩島津家	桑畑・雑樹地→実践女子学校・高専農学校・畑・御料乳牛場→実践女子学園・常陸宮邸・青山学院
29	佐倉藩堀田家	畑・茶畑・渋谷御料地→開拓使三号用地→日本赤十字社病院・樹林地→赤十字病院・久邇宮邸→日赤医療センター・日本赤十字看護大学・聖心女子大学

番号は，第３図の武家地の番号に対応．土地利用は主要なものとした．
陸地測量部・地理調査所・国土地理院の地形図，『江戸切り絵図と東京名所絵』，『江戸・東京大地図』より作成．

になった．大名との商取引を失った商人たちが，荒れ地となった武家屋敷を開墾する一方で，広い土地を求める施設が相次いで進出した（第１表）．

例えば，東渋谷台地では1891（明治24）年に飯田橋にあった日本赤十字病院が，宮内省用地となっていた佐倉藩堀田家の跡地に移転し，1894（明治27）年には1874年に設立された女子小学校などを母体とする東京英和学校（現青山学院大学）が西条藩松平家跡に築地などから移動した．その北側の淀藩稲葉家跡には1911年に市電の青山車庫が作られ，1903（明治36）年には実践女子学校（現実践女子学園）が千代田区麹町から，1923（大正12）年には1874年に設立された皇典講究所（現國學院大學）が進出した．こうした土地利用の変化はこの地域に限ったことではなく，対象地域外であるが郡上藩青山家跡に青山墓地がつくられるなど多くの変化が生じた．しかし，一方で台地上には畑地も残存しており，茶や桑などに混じってブドウが栽培され，御料乳牛地も開かれていた．

これに対して，西渋谷台地では農業と住宅地化の両面が進行した．前述したように，近世期には野菜類などが栽培され江戸の近郊農業地としての機能をもつに至っていたが，明治期には東京府の奨励もあって桑や茶などが栽培され，茶は渋谷茶・代々木茶などとしてブランド化されていた．鍋島藩による農場経営もその一端を担うものであった．元肥前鍋島家が紀州藩徳川家の跡地を「松濤園」として運営した茶園で，道玄坂の北方に700m×400m ほどの広さを有していた．一方，1909（明治42）年に旧高島・結城・岸和田藩跡地が代々木練兵場になり，1920（大正９）年には南豊島御料地となっていた彦根藩井伊家の下屋敷跡に明治神宮が造営された．

明治・大正期の西渋谷台地は，まだ農地が卓越するなかに軍事的機能をもつ土地が広く展開し，一方で徐々に宅地化が進むという土地利用を示していた．松濤園の東には渋谷川の支流である宇田川が流れ，その支流で西渋谷台地を細く刻む河骨川で，高野辰之が文部省唱歌「春の小川」を作詞したとされるのは1912年であった．このあたりにはまだのどかな風景が広がっており，武家屋敷跡地の開墾と都心からの施設の移転を受容した東渋谷台地とは様相を異にしていた．

しかしながら，このあと二つの出来事により西渋谷台地は大きく変化することになる．その一つは，

1920年に大山街道と山手線が交差する地点に渋谷駅が移されたことである．これによって大山街道沿いに駒沢方面にかけて，都市化が進展することになった．さらに，1923（大正12）年９月１日に発生した関東大震災は東京を一変させることになり，これを契機に渋谷のみならずその西に広がる地域は，さらに大きく変貌することになった．

西渋谷台地を変容させることになったもう一つは，台地の西に広がる駒場野の変化であった．江戸時代に幕府の猟場であったこの地は，明治時代になって軍事施設化が進み，それに伴って人口が増加した．この地と渋谷駅の中間に位置する西渋谷台地は，当然ながらその影響を受けるようになり，わずかな家並みしかなかった道玄坂も次第に町場化し，あるいは円山花街が形成されるなどの変化が生じることとなった．

５．昭和戦前期

渋谷川は新宿御苑などに水源をもち，宇田川などの支流を集める小河川であるが，その後玉川上水の余水を受けるようになった．斎藤茂吉は1915年に「渋谷川　うずまき流るたもとほり　うずまく水をみれど飽きぬかも」と詠んでいる．氾濫したこともあり，そこで1926（昭和元）年に河川改修が行われた．

1932（昭和７）年に渋谷・千駄ヶ谷・代々幡３町により，渋谷区が誕生した．このときの人口は約22万人であった．この時期に交通面での大きな変化が生じた．1927年には東急東横線が丸子多摩川駅から渋谷駅に直結し，1934年には帝都電鉄井の頭線が渋谷駅と中央本線吉祥寺駅とを結び，さらに1939（昭和14）年には地下鉄銀座線が渋谷駅と新橋駅間で開通し浅草駅とも結ばれた．

このように，渋谷と郊外が結ばれるようになる一方で，都心とのつながりも強化されることになったのがこの時代である．これによって関東大震災後の郊外の住宅地化が促進された．1934年には東横百貨店（現東急東横店）が開業し，渋谷はターミナルとしての性格を強めることとなった．また，渋谷を有名にした忠犬ハチ公の碑は1934年に渋谷駅前に建立されたもので，渋谷駅前のシンボルとなった．

渋谷の西から南にかけて世田谷区や目黒区が後背地化するなかで，西渋谷台地では松濤園の一部が府立鍋島松濤公園として整備される一方，残りは住宅地として細分化されるようになった．現在では中・高級住宅地となっている．

６．第二次大戦後

第二次大戦末期の度重なる空襲により，渋谷区域の80％が焦土になったとされる．疎開も加わり，終戦後の人口は推定でわずか4.6万にまで減少したが，この時期西渋谷台地で変化が生じた．すなわち，1945年には代々木練兵場跡が GHQ に接収され，約92ha という広い土地が米軍住宅とその付帯施設からなるワシントンハイツとなった．

戦後まもなくは，渋谷駅を中心に闇市が立ち，駐留軍の流出物資などが扱われていた．近くには恋文横丁ができ，若者たちが集まる娯楽・飲食の場が形成されつつあった．また，1949年には道玄坂商店街ができ，1957年に全国で初めてとなる地下商店街「しぶちか」ができ，翌1958年には丸井渋谷店が進出した．こうして戦前の面影が復活する気配も次第に高まってきたが，しかし1956年でも志賀直哉が「夜など品川の海からボォーッと汽船の汽笛が聞こえてくる」と書いたように，まだ静けさも残る土地であった．東渋谷台地では，1955年に（財）日本生産性本部の前身である元社会経済生産性本部が進出するなど，業務機能の進出が芽生えていた．

一方，宮益坂や道玄坂をはじめとする坂や谷をつくってきた渋谷川は，金王坂下の六本木通り以北が暗渠化され，その上は公園や道路に供されるようになった．宇田川をはじめとする支流もほぼ同様の運命をたどっている．

7．高度経済成長期

1960年頃からの高度経済成長期は，それまでの日本の国土，風土，文化，慣習などを大きく変革させるものであった．その初期における渋谷の大きな変化は，渋谷川の谷とその西側に広がる台地の上に現れた．

1964年に開催されることになった東京オリンピックに向けてワシントンハイツが返還され，そこに国立代々木競技場や選手村などが建設され，また同年にNHKが新橋から移転した．東京オリンピック終了後，渋谷区総合庁舎と渋谷公会堂が建設され，1967年には54haにおよぶ代々木公園が開園された．その一角には代々木公園競技場などがある．

渋谷川に沿う低地でも，土地利用に大きな変化があらわれた．1960年は渋谷区の人口が最大となった年であり，282,687人を数えたがその後は減少に転じた．この頃から，渋谷区は住宅機能を低下させ，逆に渋谷駅を中心に副都心としての機能をより一層高めることになってゆく．

1967年には道玄坂下から現在の文化村通りを進んだところに東急百貨店本店が，翌年には渋谷駅北側に井の頭通りを挟んで2棟からなる西武百貨店が進出した．さらに1973年には渋谷パルコが公園通りに面して立地し，1975年にはそこから南に延びる坂道がスペイン坂と名付けられ，1979年には東急百貨店本店手前にSHIBUYA109が進出した．1989年には，東急百貨店本店横に各種ホールやギャラリー，レストラン等を擁した東急文化村がオープンした．

一方，1976年には東急新玉川線（現東急田園都市線）が整備され，神奈川県大和市まで延伸されて，渋谷の後背地を拡大させた．1978年には地下鉄半蔵門線が開業し，田園都市線との相互乗り入れにより都心との結合を強めたばかりでなく，さらに東武伊勢崎線・日光線ともつながり，渋谷は東京都心部を挟んで南北に通じる鉄道交通の一拠点としての性格も持つようになった．

渋谷が若者の街といわれるようになったのもこの時代である．1980年代中頃から渋谷の高校生の間ではやりだした，若者のファッションが「渋カジ」として定着した．次いで髪を染め，濃い化粧をして渋谷駅界隈に集まる女子高生が「コギャル」と呼ばれるようになり，さらに彼女たちが低年齢化することによって「孫ギャル」が生じた．これはコギャルの「コ」を「子供ギャル」と勘違したことによるものとされるが，いずれにしてもこうした若者が渋谷に集まることによって，渋谷駅周辺は若者の街として喧伝されるようになった．

ところで，筆者の推察に過ぎないがテレビ番組の「8時だよ全員集合」が，渋谷が若者の街と呼ばれるに至る背景として無視できないのではないかと考えている．この番組の始まりは1969年に遡るが，多くの公開録画が渋谷公会堂で行われた．これを視聴する若者たちが渋谷駅から公園通りを歩いたことが，やがて駅から渋谷公会堂に至る地域の商業形態を変質させたのではないかと推測できる．また，若者の街へと変化するなかで，とくに女性のファッションを先取りするファッション界の関係者が集まるようになり，渋谷駅を中心とする地域はファッション情報の発信地ともなった．

一方，宮益坂から東渋谷台地ではあまり変化はみられなかったが，その中にあって1974年に旧都電青山車庫跡地に国連大学本部が設置され，1979年に隣接してこどもの城が開館した．また，1975年には金王坂下に東邦生命本社ビル（現クロスタワー）が建設されるなど，非商業的機能の立地も目立つようになっていた．

8．現代（バブル経済期以降）

1990年代の後半になって，渋谷に新たな変化が生じた．その一つはいわゆるビットバレーとよばれたもので，bitter（渋）valley（谷）の造語であった．これはインターネット関連のベンチャー企業が300～400社集中する状況をカリフォルニア州のシリコンバレーに模したもので，必ずしも渋谷区内に限ったものではなく，六本木，恵比寿，下北沢あたりも含む範囲であっ

たが，この集中も若者の街である渋谷がそれらの誘因となっていた．ただし，現在ではその中心は六本木に移っている．

渋谷駅を中心とする地域は，六本木や赤坂などに比べ，さらには新宿や池袋などの副都心と比べても，超高層ビル化を伴う再開発はかなり遅れていた．それがようやく動き出したのは，20世紀最後の年であった．2000年４月に，複合ビル「渋谷マークシティ」が開業した．井の頭線渋谷駅から西に伸びる細長い範囲にイースト棟（地上25階，地下２階，高さ99.67m，ホテル・店舗が主体）とウェスト棟（地上23階，地下１階，高さ95.55m，オフィス主体）が建設され，4階からなるマークシティモールは両者を結ぶだけでなく，道玄坂上までの上り坂を平坦で魅力的な通路に変えた．

翌2001年に，渋谷駅の西約200m の旧東急本社跡地に「セルリアンタワー」が開業した．地上41階，地下６階，高さは約184m で，ホテル，オフィスを含む複合型ビルであり，能楽堂も設置されている．

この二つの超高層ビルの出現によって，渋谷の街は景観的に新宿をはじめとする高層ビル群の先行地に一歩近づいたといえる．また，これらの高層ビル化には「大人の街，渋谷」を取り戻すというコンセプトも含まれていた．長い間若者の街とされ，敬遠気味であった大人を呼び戻すことが渋谷の商店主たちの悲願であることを考えると，この変化が渋谷を大人の街へ戻すのか，あるいは大人と若者が共存する街となるのかも注目される．

この時期の変化は，渋谷の谷が中心であったといってよい．渋谷駅周辺でも小規模な業態変化は多くみられる．ただし，変化の多くは山手線の西側で進んでいる．これに対して，山手線の東側での変化は少ない．これは山手線の西側の方が坂下までの距離がいくらか長く，平坦地がやや広いのに対して，東側は狭くさらにバスの発着所がかなりの部分を占めていることも影響している．そのバスターミナルの東側にあった東急文化会館が2002年に閉館した．1956年に開館し五島プラネタリューム（2001年閉館）の円形ドームを載せた地上８階，地下１階の複合ビルは，渋谷駅周辺のシンボルの一つでもあった．この跡地は，当分の間地下鉄工事の作業基地として利用されるため再開発はかなり先になるが，この再開発の行方は渋谷駅東側の形態や機能を変化させる一つの要因となりうる．

９．地域内の変化と周辺地域との連担化

渋谷への来街者の行動パターンについて，清水（2000）は「渋谷は循環器タウンである」としている．渋谷の街は，渋谷駅を中心に道玄坂，宮益坂，公園通りなど道路が四方に通じている．来街者がある通りから別の通りに向かうという回廊型ではなく，駅から目指す通りに向かいまたその通りを駅に戻るというパターンが主体で，それを循環器タウンと称したもので興味深いとらえ方である．かつて金沢で道路が交差する四つ角に面した四周の性格から，機能分担や競合等について論じたが（大塚，2004），渋谷ではそれぞれの通りに沿ってそれらをみることができるのも特徴である．

さらに，渋谷駅を中心とする地域が変質するだけでなく，その外縁にあたる周辺地域も変化してきた．本論の対象地域外であるが，原宿の竹下通りが若者向けファッションを中心とした機能に変質していたのに続いて，同潤会アパート跡を大変身させた表参道ヒルズを核とする表参道も装いを新たにし，両者はより一層結びつきを強めるようになった．

一方，東渋谷台地上では地下鉄表参道駅付近を中心に変化がみられるようになり，青山もファッション機能を高めてきた．さらに，宮益坂上が表参道から青山通りを通じて六本木方面と連担化している．このように，周辺での変質地域が渋谷駅を核とする地域と連担するようになってきた．また，南西側では東急東横線代官山駅を核とした変質がみられ，渋谷との連担化を暗示させている．

Ⅳ　おわりに

以上，渋谷の歴史的変化を地域層位として表現し，それぞれの時代の地域層の特性とその変化をみてきた．中央部の低地とそこから東西に続く坂と，その先の台地上がどのように変化してきたかがわかる．

東西の変化は，近世以降の都心力の増強・拡大が周辺に波及したことと深く関わっており，近代以降は広大な武家屋敷跡地がそれらの変化を受容した結果であった．一方，渋谷川に沿う低地の変化が南北軸の変化を生み，さらに東西の坂と台地を変化させることになった．こうした東西と南北の変化が，この地域の地域層位を複雑で特色あるものにした．

ある時代の地理的空間をつくり上げた地理的事象は，次の時代には別の地理的事象に取って代わられ，それによって景観は変化する．地理的事象は，ある時代の要請を受けたものであると同時に，その地域を変容させる要素でもある．その中でも，特にその時代に大きな影響を及ぼす事象が，田中（1949）のいういわゆる顕象であるといってよい．それはやがて残象，消象となりながら，一方で次の時代における初象が生み出され，それが顕象へと変質していくことになる．

以上述べてきたそれぞれの地理的事象は，点としての分布であるが，それらの集積や広がりから配置の秩序を見いだすことが可能である．それによって，ある地域のある時代の地域層を明らかにすることができるようになり，その時間的変化によって地域層位をとらえることが可能になる．

地域とは，自然環境と時間の流れ，それに人間と人間が作り出してきた様々な現象が一体となったものである．本論はそのなかの時間の流れをどうとらえ，どう表現するかという一つの方法を地域層位として示したものである．こうした概念とその表現方法は，地域の「仕組み」を明らかにするうえで，重要で効果的なものであるといってよい．

（受付2007年４月18日）
（受理2007年７月23日）

参考文献

大塚昌利（2004）：金沢市の中心部における「四つ角の地理学」地域研究，44-2，45-54.
角川日本地名大辞典編集委員会（1978）：『角川日本地名大辞典』13　東京都，角川書店，1253p.
斉藤　功（2006）：中央日本における盆地の地域性－松本盆地の文化層序』古今書院，268p.
清水嘉弘（2000）：異種複合の町，渋谷，『地域開発』428，4-8.
白石つとむ編（1993）：『江戸切絵図と東京名所絵』小学館，197p.
田中啓爾（1958）：『地理的総合研究』古今書院，360p.
田中啓爾（1949）：『地理学の本質と原理』古今書院，400p.
田村百代（1984）：『田中啓爾と日本近代地誌学』古今書院，180p.
東京学芸大学地理学会30周年記念出版専門委員会（1982）：『東京百科事典』国土地理協会，729p.
東京都渋谷区（1966）：『新修渋谷区史』上・中・下巻，3，253p.
東京都渋谷区教育委員会（1977）：『わたくしたちの渋谷』，126p.
服部銈二郎（1984）：『都市の表情－らしさの表現像－』古今書院，259p.
服部銈二郎（1985）：陶業地「益子」の地域診断，『都市を読む　地域を診る』所収，同友館，262p.
服部銈二郎（1989）：江戸・東京の今昔－都市の情感－，『江戸　町の風光』立正大学文学部公開講座録所収，10-30.
正井泰夫監修（1993）：『江戸東京大地図』平凡社，205p.

REGIONAL STUDIES Vol.48 No. 1 pp. 1～13
2007－11 ISSN 0389-6641

Chiikisoui (“Layers” of land utilization) of the Shibuya Region, Tokyo

Masatoshi OHTSUKA*

This paper will explain the *Chiikisoui* (“Layers” of land utilization) of the Shibuya region. To express as “layers” like stratum the historical changes of each era is an interesting method in geography.

The Shibuya region is made up from three topographical features: a strip of lowland along the Shibuya River, two slopes along both sides of the lowland, and diluvial uplands-namely the East-Shibuya upland and the West-Shibuya upland.

The *Chiikisoui* is formed of eight “layers” and the features of each layer are as follows:

Primitive and Pre-middle Ages: There were primitive hunting and gathering societies scattered across the area. During the Pre-middle Ages toms were built on the uplands.

Middle Ages: This region was ruled by a powerful family clan which used Shibuya as their family name. They built a castle on the edge of the east upland. Dogen Owada, who was a subject of the Shibuya family, lived on the hilltop of the west-side slope for several years. The Dogen-zaka slope road took his name.

Modern Age: The east upland was designated as the west-side defense zone for Edo castle by the Tokugawa shogunate, and many *daimyo* (Japanese feudal lords) residences and temples with extensive gardens were built there as a defense measure. In the west upland area irrigation canals were built and forests were felled to create farmland. In the lowland area rice farming was extensively carried on, many water mills were built along the Shibuya River, and river branches and irrigation canals were opened.

Meiji and Taisho Ages: Nihon Railway (the present Yamanote Line) was laid nearby the Shibuya River. In the lowland urbanization spread rapidly and factories were built there. At the time of the Meiji Restoration in 1868 *daimyo* residences were turned over to the private sector or confiscated by the Meiji government and Imperial Household. On the east-side upland universities, hospitals and military bases spread to these grounds with the general urbanization of the times. On the west-side upland Meiji Jingu (Shrine) was built on the former site of the Ii *daimyo* residence by the Imperial Household. The sites of the Suwa, Mizuno and Okabe *daimyo* residences and the nearby area were consolidated into the Yoyogi Drill Ground. But this area was completely destroyed in the Kanto Earthquake in 1923 like the other regions of Tokyo and Kanagawa prefectures.

Pre-war Showa Age: During the reconstruction after the earthquake private railways and a subway system were started. The Toyoko (the present Tokyu) Department Store was built near Shibuya station and the station area grew to become one of the subcenters of Tokyo. Following this, the western parts of the Shibuya region were gradually urbanized. However, Shibuya and the neighboring areas were reduced to ashes by the U. S. bombings during World War Ⅱ.

Post-war Showa Age: The Yoyogi Drill Ground was taken over and converted into the Washington Heights apartment complex, and the area was gradually reconstructed. Washington Heights was later

returned to the Tokyo Metropolitan Government and changed to the site of the main stadium and living quarters for the athletes during the Tokyo Olympic Games in 1964. A southwest part of the area became the site of the NHK Broadcasting Center. During the high economic growth period, new railways and subways were opened, existing railways and subways were extended, and many new stores including department stores were built along the main streets and alleys. After the Tokyo Olympic Games the athletes' living quarters were changed to the National Olympic Memorial Youth Center and stadiums were changed to the Yoyogi National Stadium and other sports arenas. The remaining land was maintained as Yoyogi Park.

Present Day: In recent years, multiple high-rise buildings have been built in this area. Furthermore, due to the rapid growth of the fashion, information and service industries not only Shibuya, but also the surrounding areas of Harajuku, Omotesando, Aoyama, Roppongi and Daikanyama have rapidly developed. These areas are now linked with Shibuya station and the surrounding area.

[Keywords] 1 *Chiikisoui* ("Layers" of land utilization) 2 Shibuya River
3 Lowland, slope and upland 4 Daimyo residence 5 Shibuya

*Faculty of Geo-environmental Science, Rissho University